

写真構成

特別付録

QWT型エンクロージャ・キットのつくり方

■編集部

今回のキットは、本誌と同時期に発売のONTOMOOK「これならできる―特選スピーカーユニット・パイオニア編」特別付録6cm型フルレンジ・スピーカーユニットとの組合せを狙って小澤隆久氏が設計したQWT型エンクロージャ。QWTについて

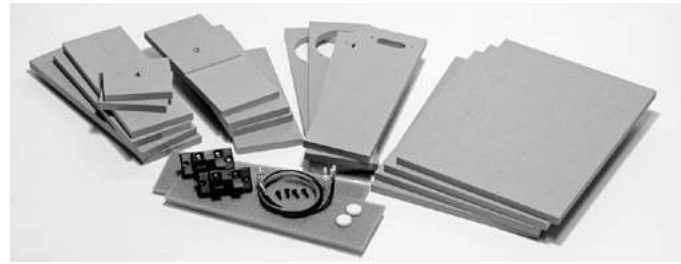
は前項で説明されているが、このキットはコンパクトながらスケール感のある再生が特色といえる。写真でも解るように以前の付録にあったバックロード型に比べるとややシンプルな構造で作り易さも特徴といえそう。製作に特殊な道具は必要ない。取材

時の写真にある端金などは無くても、組み立て時にクラフトテープを使って接着部を仮止めする、レンガやツケモノ石などを錘しに使用して組み立て部の固定をするなどの工

夫をすればしっかりとした仕上がりで完成する。接着剤は馴染み深い木工ボ

訂正

p5～6に誤りがありました。板材の番号は1～4までとなっており、正しくは本票のようになります。お詫びして訂正いたします。申し訳ございません。

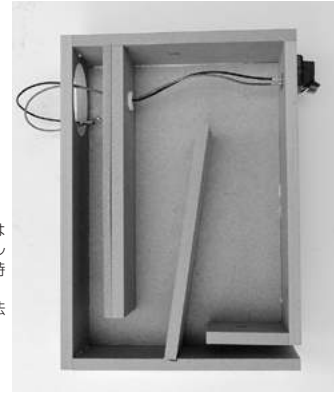


キットの内容

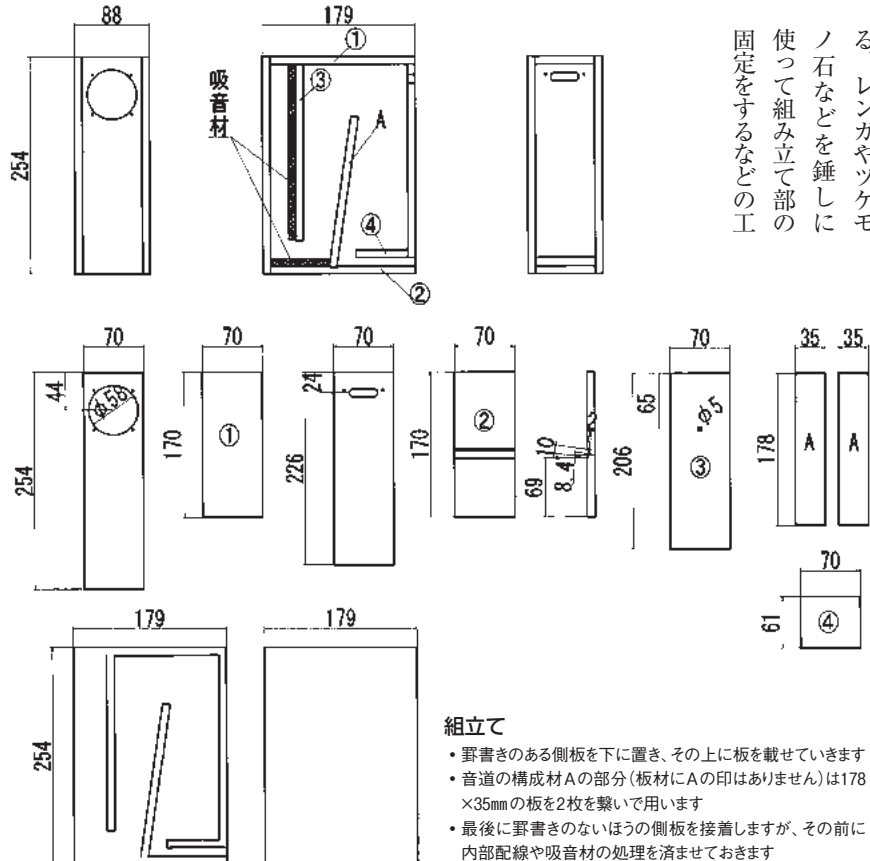
加工済み板材	2台分
吸音材	発泡材シート大小2枚ずつ
入力ターミナル	2個
内部配線コード	ファストン端子付き2組
ケーブル穴埋用パッキング	2個
ターミナル取付け用ネジ	2個分4本

組み立て時に必要なもの

- 木工ボンド / 木工用接着剤
- プラス・ドライバー
- クラフトテープ
- 雑巾など



QWT型エンクロージャの内部。ちょっと見はバックロードホーンと似た印象だが、このモデルはシンプルな構造で初心者にも作りやすいのが特色で工作行程も少ない。吸音処理は余裕があれば、小澤氏推薦の処理方法(前頁参照)を施すのがおすすめ

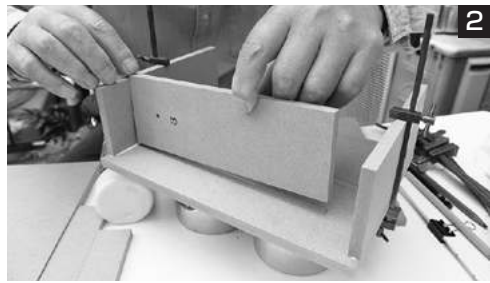


組立て

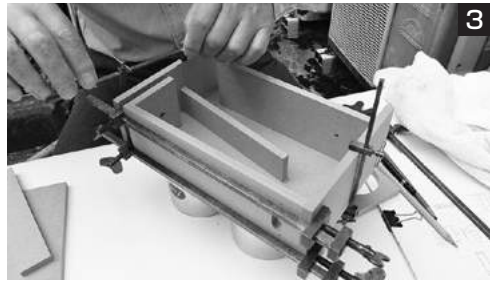
- ・ 野書きのある側板を下に置き、その上に板を載せていきます
- ・ 音道の構成材Aの部分(板材にAの印はありません)は178×35mmの板を2枚を繋いで用います
- ・ 最後に野書きのないほうの側板を接着しますが、その前に内部配線や吸音材の処理を済ませておきます



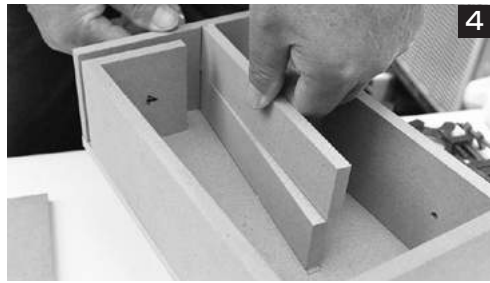
1 片方の側板に板の取付け位置が野書きされているので鉛筆などでなぞると見やすくなり作業性がよくなる



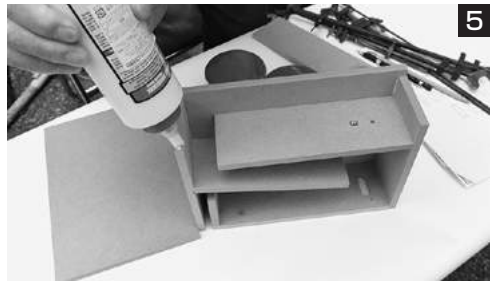
2 今回は写真取材を優先したため、組立ての手順は特殊。まず、野書きのある側板を敷いてその上に天板、地板、リアパッフル、音道系の板をのせるようにして接合していく



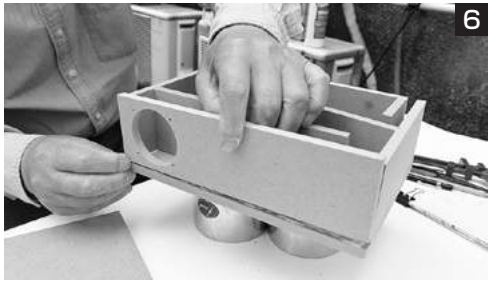
3 ここまで作業が進むと音道の形状が見えてくる。このエンクロージャは端金は小さいもので済むし、用意出来なければクラフトテープや適当な錘しを使って組立てても問題ない



4 音道の板Aの部分は板切り出しの関係で2枚組合わせになっている。板2への接着部分は角度がつくホソが切られているので組みやすく、強度もあがる



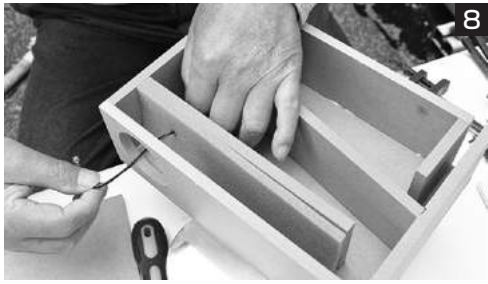
5 写真撮り優先のためフロントパッフルはこの段階での取付けとなった。接合部分(板1、2と側板)へ接着剤を塗布、あまり多く塗りすぎても無駄になる



6 接着剤のみ出しはよく絞った雑巾できれいに拭き取るようにする。はみ出した接着剤が残ると完成後の塗装時にムラができることもある



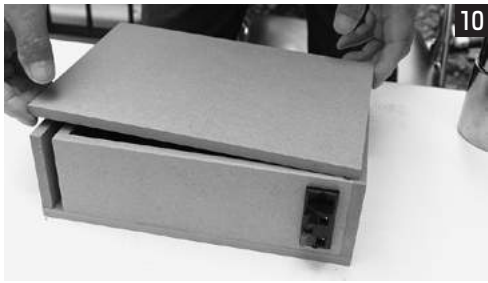
7 最後の側板取付け前に配線処理。付属の入力ターミナルにファストン端子の付いた内部配線コードを接続してから木ネジでターミナルを固定する



8 配線コードを吸音材を接着剤で貼った音道仕切り板3の穴加工済み部分に通してユニット取付け穴へもって行く。入力ターミナルのファストン接続の⊕⊖に間違いがないかもチェック



9 配線コードを通した音道仕切り板3の穴に付属の丸い目止めテープを貼って隙間を埋める



10 組立て内容にミスがないかを確認してから、側板と接合する音道系の板の木口部すべてに接着剤を塗って野書きのない側板を付ける。重ねた本などの錘しやクラフトテープで固定して接着剤が固まれば完成

ド以外にも様々なものが売られているので乾燥時間などを参考に選ぶとい

エンクロージャ内の吸音材の種類や挿入位置などは音との関係が大きい

に調整ができないので決断が必要になる。さらに次項にもあるように、完成し

たエンクロージャの外装仕上げはロックスだけがなく、音にも影響するのでぜひ実行しよう。